

Reference 論

— Relativization と冠詞 —

新 妻 英 勝*

(昭和 47 年 4 月 14 日受理)

On Reference

— The Articles and Relativization —

by Hidekatsu NIIZUMA

In up-to-date theories of syntax and semantics strong proposals have been made about the transformational relationship between the definite article and the process of relativization. However, many facts do not justify such a treatment of the article and, oddly enough, little justice has been done to the so-called indefinite article. This may be because of the decidedly wrong assumption that it gives the basis on which to introduce the definite article.

The articles in English are essentially a matter of reference and they are to be defined as proclitic elements indicating the Speaker's presuppositions about the Hearer's identifying knowledge. The many subtle characteristics they display contrastively are statable in terms of the intricate relationships between the speech factors.

This paper aims to revalue some of the important conclusions from a syntactical point of view and justify the assumption suggested above by giving a uniform account of the variously discussed problems about the articles.

I. 概 説

Reference に関する理論の出発点として重要なことは「言語」には混同を許さないレベル—language と speech—が存在する事実の確認である。reference は speech (運用言語) の function—正確には speech の要因としての話者の意図の function—であって、language (知識言語) には属さない。語の「意味」は language に属する事項の一つであるが、或る特定の対象物 (referent) を指向して或る表現を用いる (referential use), また、その対象物について記述・分類を行なうために或る表現を用いる (predicative or attributive use), ということは speech に属し、これらは language に属す語の「意味」に話者が加えるそれぞれに特徴的な機能である。

* 北見工業大学一般教育等

註 'referring expression' として用いられる固有名 (proper name) が, speech function として [name] としても [description] としても用いられる区別を立てているが, この区別が 'referring with or without denoting' の区別と対応するならば, 記述形式の表現である definite description, indefinite description にもこの用法上の区別が認められるので, referential use にも二種の下位区分が必要となる。が, 問題の本質をとらえるために前者, 即ち referent をもつ descriptions を中心に論を進めることにする。

reference の問題は当然冠詞の問題を含むことになる。従って, speech を構成する要因としての「話者・聞き手・対象物・用いられる言語 (definite description vs. indefinite description)」の相関性を解明することは冠詞の問題を解決することになる。

Ii. Presupposition か Assertion か

話者が或る目的をもって文或は語句を用いる, 聞き手はそれに解釈 (semantic interpretation) を与える。それは自明の理であるが, 両者の相関は speech を達成する上で複雑な問題である。この表題の問題は B. Russel の Assertion 説に始まり, logico-linguistics ではしばしば問題とされる。

註 数学的アプローチと評価されてよい Russel の理論においては, 文は常に significant (真或いは偽のいずれかの命題を表現するという) であることが説明可能となるような論理の確立であって, その理論の主要な構成物として導入される記述関数 (descriptive function) はこの speech の要因を不要なものとする。問題となるのは, 関数 ϕ の一定値即ち referent の存在が, その記述 (definite description) を含む文の複合命題の一つとして assert されるという問題のとらえ方にある。

Iii. Definite Description について

ここではごく一般的且つ原則的な説明にとどめる。人はだれでも他から区別することの出来る種々の個体 (individuals) が存在することを知っている。これらの個体は知識として個々の人間の思考世界に存在すると考えられる。もし或る特定の個体を他のすべてから区別することが出来るならば, その人は, その個体に関して弁別的知識 (identifying knowledge*) をもつという。

さて, 話者が referring expression として definite description を用いる場合には, 個体として存在する対象物 (unique referent) は聞き手の弁別的知識の範囲内にある事物でなければならない。正しくは, 話者はこの前提 (presupposition) に立つ場合にのみ definite description を用いるのである。従って, 話者の主体を離れて, definite description 自体がそれが示す事物の存在を主張する命題を表わすという Russel の考えは斥けられねばならない。話者・聞き手の世界にのみ speech の要因としての対象物は存在するという一般的仮説に反する。definite description には話者の前提条件が imply されていると考えねばならないであろう。

Iv. Indefinite Description について

上述のように定義される話者の前提条件を欠く場合に, 話者は referring expression とし

* P. F. Strawson (1964)

て indefinite description を用いる。従って, *intentional* な対象設定であって, indefinite description は, 問題とする事物の存在を主張する命題を imply する。この点で definite description とは異なる speech function をもつ訳である。

この論文では, 冠詞は指示機能を決定する要因としての「聞き手の弁別的知識に対する話者の presupposition」を表現する proclitic element として定義し, 従来の重要な主張を再評価し, 冠詞の諸問題に統一的な説明を与えるのが目的である。

II. Relativization と冠詞

最近の変形理論における主張として注目すべきことは, node として Article は deep structure には不必要であるとする点である。所謂不定冠詞は deep structure では数詞の *one* であって, 無強勢の proclitic element である場合に義務的に *one* を *a(n)* に変える音声規則によって得られる derived element である。また, 定冠詞については, 同じく deep structure element ではなく, relativization が antecedent noun に *the* を加える (added element)。更に, *a, the* は surface structure において, 冠詞としての同一の status をもつだけでなくその特性が説明されねばならない。以上を主張する理論* が説得力をもつためには, 少なくとも次の事実が説明し得るか否かによる。

1. deep structure において数詞 *one* を許容しない名詞が surface structure において *a(n)* をもつ場合がある。

2. relativized N が *a* も *the* もとり得る場合がある。

3. 関係節の有無に拘らず *the+N* が用いられる。

1a He left Paris.

He left *a Paris* that had become cold.

1b You know Providence.

The Providence you know is no more.

この例は本源的に definite である固有名詞に relativization が結果的に *a, the* を加えたものであるという考え方は部分的に正しい。が問題は, definite な固有名詞が制限節によって更に restrict されると考えるのは論理的に不合理である。1b について,

The [*aspect of*] Providence you know is no more**.

のように制限節の存在を合理化するパラフレーズによって, 固有名詞としての資格を失わずに *the* を説明することは出来るが, 1a の場合, *a* も *the* も可能と思われるが, 同様のパラフレーズは容易に得られそうにない。ここで固有名に関する Russel の所説は有効であって, 機能上 [description] として固有名詞を用いたとすれば冠詞を排除することにはならないと考えられ

* David M. Perlmutter (1967)

** Zeno Vendler (1967)

る。[description]として用いれば、いわゆる referent に関しての existential proposition が問題となりうるからである。[name]として固有名詞を用いれば syntactic な慣用に従って制限節を用いることは出来ない。したがって、1a, 1b とともに、固有名語は descriptions であると考えられる。

a 或いは the が名詞—いかなる種類に属するものであっても—に加えられるという仮説が正しいとすれば、名詞のみが deep structure element であって、冠詞は surface structure に至る一段階で、—relativization が適用される段階で—、話者が一定の条件に従って名詞に加えると結論することが出来る。変形理論においては、冠詞は、数量詞を含めて、名詞が生成する clause の外で generate されるという考え方が一般化して来ている事実は上記の説明を支持するものと考えられる。

- 1c He greeted me with warmth.
 He greeted me with a warmth that was puzzling.
 He greeted me with the warmth that was expected.

puzzle, expect が冠詞の選択を決定するのではなく、この二語は Klima のいわゆる adversative pair* を話者の世界に形成する—surprise vs. sure, ashamed vs. glad against vs. in favor of—と考えられる。

- 1d I know a student who plays the violin.
 1e I know the student who plays the violin.

play は冠詞の選択に関しては neutral というより irrelevant である。speech factors の関連においてのみその原因を求めるべきである。ここで重要な点を指摘しなければならない。1d の関係節は話者がこの文を用いて行なう主張の一部分であるが、1e では動詞の argument の構成要素であって、聞き手が正しく referent を identify することを目的に用いられていて「その学生はバイオリンを弾く」という 1e と同様の主張をするためのものではない。restrictive であるのは 1e であって 1d ではない。

- 1f I know a student, who plays the violin.
 1g I know the student, who plays the violin.

関係節を欠く場合、1g はそれでも self-sufficient であるが、1f は non-informative である。冠詞 a の使用は話者のみが identify する intentional object を示し、聞き手には名詞によってその referent が属す class が示されるにすぎない。したがって、1d, 1f がいずれも message として成立するためには関係節は義務的であると考えねばならない。

1d, 1f の差は関係節が restrictive vs. non-restrictive の対立に在るという従来の説明は誤りである。1f の先行節は後に定義される identifying S** としてのみ機能し、前述したように、

* Edward S. Klima, Negation in English

** Zeno Vender (1967) の用語

聞き手にとっては non-informative である。話者は主張の重点を関係節におくと解釈しなければならない。

- 1h A girl was an Eskimo. The girl ate only fish. She ...
 A girl was an Eskimo who ate only fish. The girl ...
 1i A girl was an Eskimo who ate only fish. The girl ...

1h の両文は同じ文意を表わす。predicate NP は non-referential であるが relativization を許す。1i の関係節は restrictive では決していない。

- 1j* I met a girl who speaks Basque.
 A girl I met speaks Basque.

この両文は関係節のそれぞれが話者の主張を表わし、文意に差異がない。主張が順序を換えたにすぎない。

- 1k** The girl I met speaks Basque.
 I met the girl who speaks Basque.

この両文は意味を異にする。それぞれの関係節が表わす内容は聞き手には既知の事実であるという話者の前提条件であって、それぞれに異なる主張を表現する文である。

III. 定冠詞に関する問題

これまでは冠詞が *a* であるか、或いは *the* であるかに応じて、関係節の表わす内容が話者の assertion であるか或いは presupposition であるかを説明することであった。またこのことは、*a* 或いは *the* の選択の原因となる speech の要素間の一定の関連性から得られる帰納的結果でもある。一方、定冠詞は restrictive relative clause (の存在) を suggest するという Vendler の所説、或いは relativization が先行詞に *the* を加えるという Perlmutter の主張は、それぞれ論点に相異があっても、*the* に関する限りは正しい。がいずれも syntactic な説明を与える立場をとる以上は理論上の不備を補うことは容易ではなさそうである。Vendler の基本的な論点の一つであるが、*a, the* の問題は単一文では説明不可能であって、名詞が identifying occurrence である文 (*a+N* として現れる) を含む一定の discourse の構造分析が必要であるとして *the+N* が singular term*** として、即ち definite description を referring expression として文に導入する linguistic device として relativization をとらえているが極めて有意義である。例えば、

- 1a I see a man. The man wears a hat.

先行文は「存在文」である *There is a man whom I see.* とパラフレーズ可能な名詞 *man* に関する identifying S であれば、後続文に singular term として *the man* を導入する基礎を与え

*、** Sandra A. Thompson (1971)

*** Zeno Vendler (1967) では linguistic term として用いている。

る。いわゆる 'previous mention' として機能する文である。その場合、

1a' I see a man. The man [*whom I see*] wears a hat.

のような relativization が可能で、この discourse が連続的であることが示される。このようにして、定冠詞は restrictive relative clause の function であることが説明される。1a は 1a' の関係節が省略 (recoverability condition が満足されるので) された結果である。

しかし、identifying S が実際には表現されないことが多い。Vendler のこの場合の説明原理は omission であって deletion ではないので理論の発展がない。例えば、次の文

1a'' The man I see wears a hat.

では、関係節が identifying S として機能する事実* が上の説明原理からはとらえられない。Vendler-Robbins** の理論では、 $a+N$ が basic で relativization によって a は *the* によって replace される。この点で、即ち Perlmutter が *one* (冠詞 $a(n)$ の underlying form) が basic で *the* の直後の *one* は省略されるという規則を設けている点は比較されてよい。relativized N が a を preserve するか否かは uniqueness condition の有無によって決定される。例えば

1b I know a man. A man killed Kennedy.

1b' I know *a man* who killed Kennedy.

1b'' I know *the man* who killed Kennedy.

1c I know a man. A man fought in Korea.

1c' I know *a man* who fought in Korea.

1b では predicate verb *kill* が unique agent を presuppose するので 1b'' が得られ、1c では *fight* にはそのような選択制限がないので 1c' で stop すると説明されるが、一般的に動詞にこのような選択素性を設定することはむずかしい問題であろう。1c' の *a man* の代りに *the man* を用いることは勿論可能であるし、1b' が全く ungrammatical でもない。

IV. 以上は冠詞の用法は speech の function であって、reference の問題としてその本質的な特徴を問うことが正当であることを主張するものである。純粹に syntactic な立場からは説明が不可能と思われる。deep structure に対応する surface structure の観点からみれば、surface structure としての冠詞の機能は、deep structure で一般的にとらえられる grammatical relationships とは全く異質なものである。変形部門においても、relativization と冠詞の分布は全く irrelevant であるといってよい。ここでは、surface structure において、 a , *the* の用法がパラレルである事実を示すことによって、冠詞は話者の presuppositions の function として定義可能であることが説明できると思う。

* 'previous mention' として機能する identifying S が表現される場合は、話者が意図する object を聞き手に理解させるための linguistic device であって、この文が discourse の先行文として、或いは関係節として表現されても、その目的 (speech function) は同じである。この *the* はいずれも anaphoric である。Robbins (1968) を参照。

** Beverly L. Robbins (1968)

IVi. Ppredicate NP

いわゆる predicate S (Subj. NP-copula-pred. NP) において, predicate NP として用いられる $a+N$, $the+N$ は subject-NP に用いられる場合とは speech function を異にすることは既に述べた通りであって, non-referential である。

1a My sister is a doctor.

この non-referential NP に次の二通りの relativization が可能である。

1a' My sister is *a doctor* who took care of him.

1a'' My sister is *the doctor* who took care of him.

1a' は医者が私の妹以外にもいることを暗示するが, 1a'' は私の妹が唯一の医者であることを明示する。関係節はいずれも話者の assertion を表わす。が 1a'' には, この外に, 話者が関係節を identifying S として用いる場合があって, この場合 1a'' は identity S である。指示機能から 1a'' は曖昧性をもつ。1a に対応する次の文

1a''' My sister is the doctor.

は不完全な文であって制限節が義務的であるが 1a には選択的である。predicate NP が non-referential な用法の場合, 唯一性 (uniqueness) の条件が満足されるか否かについての話者の presupposition に従って 1a' か或いは 1a'' が用いられるのであって, relativization と冠詞とは直接の関連はない。

IVii. Subject NP

文のこの位置は reference を論ずる論理学者によって最も注目され, Quine は 'purely referential position' とよんでいる。即ち, referring expressions のみが用いられる文中の位置である。

2a *The doctor* who cured him is my sister.

この文で subject NP が non-referential な解釈をうけることはない。

2b *The doctor* came to see me.

2b' *A doctor* came to see me.

2b' の 'a doctor' は不定 (indefinite) ではない。聞き手の知識に対する話者の presupposition が a の選択の原因であって, 話者にとっては a certain doctor である。この用法は 2b の definite と区別して specific という用語が用いられてよい。前節の 1a の a は non-specific である。このほか, いわゆる 'verbs of propositional attitude' (例えば, *want*, *look for* など) の目的語, 或いは目的語補文中の referential positions に用いる $a+N$ については specific か non-specific に関して indefinite ではあるが, a の indefinite な用法はない。この問題の位置に $a+N$, $the+N$ の両者が用いられる場合には, 例えば

2c I am looking for *the girl* who lives in that house.

2c' I am looking for *a girl* who lives in that house.

2c では、聞き手が *the girl who lives in thothouse* = *Mary* であることを知っていても置換 (substitution) が可能か否かの問題が生じる。が 2c' では同様の曖昧性はない。2c には認められないが、2c' には一定の referent が話者の思考世界に存在するか、或いは存在しないかに従って specific 或いは non-specific の解釈をうける曖昧性がある。以上のことは冠詞の選択と密接な関連をもつ問題である。

さて、2a と比較して、

2d *A doctor* who cured him is my sister.

は主語の位置であっても ungrammatical である。これは、*A doctor* … で始まる文は、specific な a+N であっても definite な predicate NP とは両立しないためである。この文は identity S である。

註 Subject NP が referential であることを示す興味ある例を引いておく。Perlmutter に従えば、数量詞+名詞はそれ自身は indefinite である。が次の文、

1 Everyone in the room speaks *two languages*.

1' *Two languages* are spoken by everyone in the room.

2 *Two languages* are familiar to everyone in the room.

1 では *two languages* は任意の二国語を意味するが、1', 2 では特定の二語を示す。更に Kiparsky-Kiparsky によれば、動詞 *report* は、その補文の事実性 (factivity) に関しては無指定 (unspecified) であるが、次の文

3 The UPI reported *that Smith had arrived*.

3' *That Smith had arrived* was reported by the UPI.

3' では、話者が報告文の内容は事実であると考えている意味が伝えられるが、3 にはそのような意味が認められない。

IViii. Generic NP の一解釈

subject NP は前節のように、definite 或いは specific であるが、このほかにいわゆる generic な用法がある。

3a *A dog* is faithful.

3a' *The dog* is faithful.

3a では「話者の presupposition」がないが 3a' には明らかに存在する。Vendler は 3a' にも identifying S の存在を認める。例えば次の文、

3a'' The animal *which is a dog* is faithful.

から 3a' は得られると説明する。この higher genus の存在が話者の presupposition の内容であると考えたい。3a' は勿論 definite な解釈をゆるす。

3a''' Mary keeps a dog. *The dog* is faithful.

したがって、3a' は definite か generic かに関して曖昧である。

3b *A motor-car* is a practical means of conveyance.

3b' *The motor-car* is a practical means of conveyance.

この両文はパラレルな例であるが、次の文

3c The motor-car has become very popular these days.

3c' *A motor-car has become very popular these days.

では「話者の presupposition」がなければ非文 (3c') である。

最後に *a, the* の用法上の parallelism を示す例をあげておく。

3d *An American* was expected to climb Mt. Everest. [Specific]

3d' *An American* was expected to climb Mt. Everest in those days. [generic]

3e A shepherd approached. *The shepherd* wore picturesque costume. [definite]

3e' A shepherd approached. *The shepherd* wore picturesque costume in those days. [generic]

References

- 1) Bertrand Russel (1919): Introduction to Mathematical Philosophy.
- 2) Bertrand Russel (1950): On Denoting.
- 3) Beverly L. Robbins (1968): The Definite Article in English Transformations.
- 4) Carlota S. Smith (1964): Determiners and Relative Clauses in a Generative Grammar of English.
- 5) David M. Perlmutter (1967): On the Articles in English.
- 6) Edward L. Keenan (1971): Two Kinds of Presupposition in Natural Language.
- 7) P. Kiparsky and C. Kiparsky (1970): Fact.
- 8) P. F. Strawson (1950): On Referring.
- 9) P. F. Strawson (1961): Singular Terms and Predication.
- 10) P. F. Strawson (1964): Identifying Reference and Truth-Values.
- 11) Sandra A. Thompson (1971): The Deep Structure of Relative Clauses.
- 12) Willard V. O. Quine (1964): Word and Object.
- 13) Zeno Vendler (1967): Linguistics in Philosophy.